

## Byron 詩を彩った女性群像

楠 本 哲 夫

‘Childe Harold’ は George Gordon Byron が create した「珠玉の自画像」である。

Byron は投影詩人である。こんこんと湧き出づる泉の如き詩想はとどまるところがなくつぎつぎに名詩の数々を生んだ。

He was a great artist, the creator of certain types or characters, forms of humanity “more real than living men,” which have stamped themselves on the minds and hearts of many peoples, but they are made in his own image. He did not see their pattern in his mind’s eye, but he transformed, and found a new shape for a phase or part of his own being. (Ernest Hartley Coleridge).

Byron は ‘passion’ の詩人である。

“The wayward weathercock” which was Byron …… わがままな、気まぐれな ‘風見鳥’ バイロン！ Elizabeth Longford は詩人をそう呼ぶ。瞬時にして変る激情を制することができず、その passion を紙面にたたきつけ、Byronic hero が、鮮らしく、つぎつぎと、創られていった。

Coleridge が Byron 詩を評して述べた如く、—— Childe Harold は ‘珠玉の自画像’ であるというとき、それは、詩人自ら描いた克明な リアルな自画像であるという意味ではなくて、Byron 像が、詩人自らの心の中で変形され、ひとつの、新しい、もっとリアルな、すばらしい創作として描き出されたという

ことである。Childe は Byron 自身ではないことを詩人は特に強調した。しかし—— Childe Harold は Byron 自身であると思いこんで Childe Harold をめぐって乱舞した華麗なる女性群像の狂態はいかにも笑止千万であった。就中、Annabella は、数学に秀でた、理性的、合理的、冷徹な知性を誇る blue stocking として  $C=B$  と信じこみ、その大前提を推理の出発点としたこと自体に既に大いなる誤謬を犯していた。はたして、詩人との束の間の愛は——結婚—離別—そして、Annabella は詩人の祖国追放の立役者としての悲運をたどり詩人にとって最も憎むべき最も罪深き女性となった。それは Childe Harold の投じた波紋の最も大きな悲劇として、皮肉な結末を生んだ。

何故に——詩人は Grand Tour へ旅立たねばならなかったのだろうか。

憶えば、名門 Byron 家、Gordon 家の血をつぐが故に、その血が騒ぐが故に、あの Cambridge 時代の暴走……。奇しき星の下に生まれ、人も羨む美貌に恵まれながら跛の身障という「足枷」ゆえに幼少時代を、Harrow 時代を耐えぬいた、その鬱屈は炸裂し噴火しなければならなかったのである。神を怖れぬ傍若無人の遊蕩は、学業を放棄し、酒池肉林、女将、売春婦、ダンス教師と交歓し、そして大学寮には熊を飼い「熊は我が友ゆえに同居す」と放言して憚らなかつたのである。Byronic image にはたえず矛盾の影が漂う。貴族の誇りは棄て難くしかし祖先の廟からひきずり出された black sheep のドス黒い血が、詩人を絶えず不安焦躁にかりたてた。殺人、姦通、駈け落ち、近親相姦、狂人の汚辱の歴史が、さながらに己が罪として生々しく感じられるとき、暴走しなければならなかったのである。

‘English Bards and Scotch Reviewers’をもって、Edinburgh Review に対し湖畔詩人群に対しそして当代の有名詩人群のすべてを相手どり壮絶なまでに雄叫びをあげる。バイロンがけんか名人の、一匹狼として、高らかに吼える姿であった。勝算ありと自ら断ずるや、旅に出ることを考える。己が罪を清算しなければならぬ。只、逃避あるのみと詩人は考える。旅立たねばならなかったのである。

‘チャイルド・ハロルドの巡礼記’は旅の印象記である。旅立たねばならぬ

かった2年と12日間の長きに及ぶ Grand Tour (1809. 7. 2-1881. 7) のリアルな印象と告白である。

この作品は、ハレー彗星の如く突如として現れ、その妖しき光芒を放ちつつ無名の詩人 Byron を一躍、詩界のスターダムにのし上げ、英国全土の、ヨーロッパの、全世界の津々浦々にまで、詩人 Byron の名を轟かせた。そして、その投じた波紋は、……

Childe Harold は、自らの宿命に課した絶望、厭世、逃避、憧憬、修行、諦観、遍歴の旅を一巡礼者として真実一路、鈴ふり続けた。その旅立ちに祖国の岸を離れんとして万感の想いをこめてチャイルド・ハロルドの‘袂別’はうたう。

‘Adieu, adieu,! my native shore  
Fades o’er the waters blue;  
The night-winds sigh, the breakers roar,  
And shrieks the wild sea-mew.  
Yon sun that sets upon the sea  
We follow in his flight;  
Farewell awhile to him and thee,  
My native Land—Good Night!

さらばぞ、さらば	祖国の岸辺
海原碧き <sup>あお</sup>	彼方へ消えつ
夜風は <sup>なげ</sup> 嘆息き	怒濤は吼えて
鷗 <sup>かもめ</sup> 荒れるし	声かん高く
夕陽 <sup>ゆうよう</sup> おちゆく	海 <sup>はる</sup> 杳かなる
その翔 <sup>か</sup> けゆくを	われら追いゆく
没陽 <sup>いりつひ</sup> よ ああ	汝と祖国に
さらばよ しばし	別離を告げむ

'For who would trust seeming sighs  
 Of wife or paramour?  
 Fresh feeres will dry the bright blue eyes  
 We late saw streaming o'er.  
 For pleasures past I do not grieve,  
 Nor perils gathering near;  
 My greatest grief is that I leave  
 Nothing that claims a tear.

.....  
 .....  
 .....  
 .....

'And now I'm in the world alone,  
 Upon the wide, wide sea:  
 But why should I for others groan,  
 When none will sigh for me?

妻よ 情婦よ	かりそめにする
うはべの嘆き	たれか信ずる
碧き <sup>め</sup> 腫つたふ	<sup>むな</sup> 虚しき涙
新しき愛に	やがて乾かむ
吾 哀しまず	去りし <sup>けらく</sup> 歓樂を
はた怖れまじ	<sup>せま</sup> 迫り来 危機も
されど別離に	涙 そそぎし
愛人 <sup>ひと</sup> なかりしは	吾が 哀しみぞ

.....	.....
.....	.....
.....	.....
.....	.....
千里 <sup>ちきと</sup> へだつる	海 はろばろと
うつし身ひとり	われは さまよふ
われを <sup>かな</sup> 愛しむ	人なき 今を
誰 <sup>た</sup> がため無為に	わが嘆くかや？

チャイルド・ハロルドは、ニヒルな愛を、哀を、うたう。

‘Childe Harold の巡礼記’は(1812. 3. 10.出版。)爆発的人気をもって迎えられ、一夜にして有名になる。詩人自らも驚き

‘われ、一朝にして 目ざむれば 早や 有名になりにけり’と得意然として豪語するのである。しかし——‘Childe Harold’が窮局的に詩人を‘Exile’へと駆りたてた、その結末はいかにも皮肉であった。

外遊を終えて詩人は成長した。己が罪を悔い改める Childe Harold へと成長した。だが母は既に他界し、懐かしい友人の多くは、この世を去り、現実に戻ったとき、ポツカリと大きく口をあけた、その虚無感は、拭い難いものであった。

帰国後の詩人に付き纏う、華麗なる憂愁の影に、Caroline——Annabella——Augustaの三人の女性が乱舞し、やがて詩人の永久祖国追放の運命を決定づける。

詩人の住む No.8 St. James Street は、詩人への招待状を手渡すべく、紳士、淑女の列と車で混雑し、交通は麻痺状態に陥ったという。この熱狂的歓声の中に一際目立つハスキーな声があり、これは狂おしく連呼された Lady Caroline の嬌声であった。

当時 Whig 党の宰相候補——後に宰相として在位六年間、若き Victoria 女王の adviser—William Lamb の若妻であり26才の美貌の才媛であった。

Caroline は総べての挙動において、常に小妖精の如く、貴族的放縱主義の典型的な女性であった。<sup>あで</sup>艶やかな薔薇の風情を湛え、<sup>たた</sup>社交界では一際目立ち、青磁の壺の如く、一見、<sup>こわ</sup>毀れ易く見え然も fibre glass の如く強靱な性格の持主であった。

彼女のニックネームは、‘やんちゃ娘’、‘魔女’、‘無邪気な天使’‘妖精の女王’と多彩であり、絵画、散文の才に長け真のロマンチストであった。短い亜麻色のカールは、詩人の巻き毛に向って微笑みをかけた。二人は互いに制御し得ない程に激しく情を交し合うのである。……然し、二人は出会うべき宿命を持ちながら融け合う宿命を持たなかった。

二人の初めての出会いは——彼女が詩人を一目見た時これ見よがしに派手なジェスチュアでくると踵を返した。自尊心を傷つけられた詩人は、忽ち彼女の好餌となった。其後二人は Lady Holland の館で紹介された。

詩人は早咲きの薔薇とエキゾチックなカーネーションの花束を彼女に捧げる。初めて詩人の口をついて出た言葉は——やんごとなき貴女は 新しきもの 稀なものは總べてそれが、たとえ束の間であっても こよなく<sup>め</sup>賞づるお方だと聞いております——

Childe Harola が Caroline の心<sup>あや</sup>に妖しくかきたてた魔風 恋風は、束の間の色香を愛して欲しいと詩人が贈った薔薇の うつろいゆく美<sup>め</sup>を<sup>こころ</sup>愛づる情とは異質のものとなっていた。

詩人の 甘い<sup>かりそ</sup>仮初の‘戯れ言’に Caroline は 呪文<sup>しば</sup>に縛られた如く一瞬にして妖精に化身してしまう。かくて Caroline は詩人にまわりつき蝕み続けるのである。詩人は何時の場合も 薔薇は美しくとも狂い咲く薔薇ならば自らの手で其の花卉を荒々しくもぎ取り惜しげもなくちぎり棄てるのである。

Caroline は詩人の出席するパーティには、<sup>たと</sup>仮え招待されなくとも小姓<sup>ページ</sup>の仕着せで変装し詩人の馬車に乗り込んだ。彼女が‘あの蒼白い顔が私の運命を引きず<sup>ず</sup>摺って行くのだわ’と言った言葉はその通りになってゆくのだった。

Childe Harold には 美しさと憂いの影が何処にも濃く漂っていた。そして Caroline もこの‘巡礼記’には飛びつきこれを貪る如く読み耽った一人である

が、才女である彼女は詩人と Childe Harold が全く同一人物である事を いち早く読み取っていた。運命的美しさの漂う憂愁の影には当然の事乍ら 兇運を甘受しなければならぬ暗さと謎が秘められている。

社会からはみ出し見捨てられ追放されていく人間像が Byronic hero であり Byronic lover である。

Childe Harold は所詮、世間からの追放者であった。しかも世間はこれを熱狂的に迎え、これをもて囃<sup>はや</sup>した。そしてその矛盾をはらみつつ放蕩三昧に耽溺する事により其の孤独憂愁を癒やし逃避しようとした。1812年の春と夏の間、詩人の Caroline への熱情はすっかり燃えつきてしまった。そして Caroline へ書き送った。

“貴女は小さな活火山だ。貴女の心には——かわいそうな Caro よ——貴女の血管の中には熱い溶岩流が流れている。而もそれがいささかでも冷えてくれと願うことすらできない。私は何時も貴女を最も聡明な好ましい奔放な荒っぽい困惑させる危険な 魅力的可愛い女性と思っています”。

然し5月19日にこう書いた。

“この夢はこの二ヶ月余の熱狂、無我夢中は消え去ってゆかねばならないのです”それは決別の意を書き送ったのである。事実は——Byron が、自らのスキャンダルを作りつつある一方、Caroline の積極的押しつけを好まなかったことの理由によるのである。詩人のロマンスは、常に彼の一方的エゴイズムにより清算される。この事も見逃がせない。

彼は二人の仲が冷えきった今、爪を噛むような無為、倦怠を覚えるのみで、むしろ Caroline の、しつこい 小さな首を、ひねりちぎりたい衝動にすらかられた。

Caroline は、食卓で Byron が他の女性に寄り掛かるのを目撃した時、癪をたてて自分の酒盃を噛み砕いた。そして人前であからさまに 自分の pubic hair 恥毛を数本抜き取って Byron に与え Byron のものをお返しに呉れるようにと強要した。

Byron を巡る女性の中で誰一人として——外遊中、彼とのロマンスのあっ

たスペインの、トルコの、ギリシャの、女性の中でも——これほど無遠慮、奔放、無鉄砲な女性はいなかったものを——と、詩人の心は冷えゆく思いで、Caroline から離れてゆくのであった。

Caroline Lamb は、名門の才たけた美しいうら若き人妻にして、然しその奔放なおきゃんな強烈な個性には実に溶岩流が hot にその鮮血の中に流れている情熱的な、活火山の如き、まさに火の女であった。かかる狂態の中にも、Caroline Lamb という女性は熱血詩人 Byron が束の間の——詩人のロマンは常に“束の間”であった——ロマンスとして燃え尽きる其の日迄、いかにもふさわしい熱血的女性であった事、其の点吾人は改めて Caroline に驚歎の目を向けたくるのである。

そして それは“Childe Harold”がいかにも多くの女性が耽溺する程、魅力的、憧憬的であったかを如実に物語るものである。

Caroline は、少なくとも二度に亘って、詩人に‘<sup>せま</sup>駈落ち’の事を迫った。一度は彼の部屋に変装して入り込み、今一度は彼の知人の外科医の家で、詩人に決意すべく迫った。

Lady Bessborough は結局、この‘小悪魔’を Ireland へと追放するのであるが、Caroline は直ぐに舞い戻って来て、突如として散発的に復讐を試みる。Byron の人形を作り篝火でこれを呪い乍ら燃やし続けた。

Caroline との恋愛沙汰が、まだ初期段階にあった頃、詩人は William Lamb の実の従妹に当たる Annabella Milbanke に出会った。この初々しい<sup>ういうい</sup>20才の女性<sup>ういうい</sup>は Seaham の Durham Home で、このシーズンを過す為、ロンドンへやって来て居た。然しこの時点で Byron が Annabella は生涯の伴侶として、自分には不適當で、ふさわしい女性ではないという認識があったら良かったけれども、双方にとって実に皮肉な運命の出会いとなった。

Annabella は‘blue stocking’（インテリ女性）であった。この種の女性は詩人好みではなかった。彼女は数学を専攻していた。その故に人生問題への取り組み方は終始、系統的・組織的・理性的であり“移り気”な詩人には不向きであった。Caroline と正に対照的な女性であった。然し最初の二人の出会い



一時的にせよ二人が性格的には相容れないものがある事は全く解<sup>わか</sup>らない様な、お互いに強く相い<sup>ひ</sup>惹くものがあつた。

詩人が最初彼女に会つたのは、Caroline の主催した、新しい目まぐるしいダンスの練習会であつた。1812年3月25日の事だつた。足の悪い詩人はうまく踊れないので、この官能の満足にふけるワルツを、只、眺めているだけに甘んじていなければならなかつたが、ここでは初めて踊るパートナー同志がお互いに腕を組み合う事が出来る場である。透けて見える輕羅<sup>けいら</sup>を身に纏う官能的美女の誘惑的ワルツよりも、この瞬間の詩人のムードは 慎ましやかな Annabella Milbanke にすっかり傾いて行つた。

詩人は—— Annabella Milbanke 嬢の身長に申し分のない姿態、亜麻色の髪、リンゴの頬、知的な額<sup>ひたい</sup>、真剣な表情、総べてピリッとして詩人の目に映つた。彼女が貴族の嗣子で、将来貴族たる既得権を持つ身分である事も、詩人には格別の魅力と関心と好奇心を十二分に誘つた。Annabella Milbanke としても、内心“私の知っている誰よりも Byron 卿は 話し上手な楽しい方だワ”と驚嘆し、すっかり詩人に圧倒されてしまつた彼女は、Childe Harold を貪<sup>むさぼ</sup>る如く一気に読了し其の主人公が勿論 Byron 卿自身である事を 既に察知していた。詩人が高貴な心の人であり乍ら、非常に歪められた心の持ち主である事、自分の犯した罪を認め乍らも、その悔いの翳<sup>かげ</sup>りを、憂愁を、他人の助けなしには独力では、自分の振舞いと 気持ちの軌道修正——その決意が出来ない人だと判断した。

Annabella は“Byron 卿が私の心を引き留める為には、彼に欠けているものは、只、温かい慈しみの心だワ。そしてそれはむしろ私自身の持ち味であり Byron 卿を救う為に 私の方から逆に差し出さねばならないものだ、そうしてあげたいワ”と考えた。Byron が彼女に向かつて“私にはこの世に一人も友達がいらないのです”と言つた時、彼女の献身的気持ちは、完全に高まってきて“私はこの孤独な人の為に 献身的友となつてあげる事を誓うワ”と密かに心に呟いた。

孤独の人？ Annabella の夢多かりし春秋を、奈落の底に落すべく襲つた嵐

——後に Annabella は Byron と結婚——離別の悲劇のヒロインとなる——ともいうべき詩人との出会いであった。彼女の悲劇のルーツを探る為には、この数学的分析的冷徹な思考が帰納した、‘彼女のバイロン像’を究めねばならないだろう。

‘孤独の人’という語を Annabella が使用した時、彼女の脳裏には何時も Childe=Byron なる等式が描かれていた。だから彼女の心は Childe Harold なる神話的謎の人物 即ち Byron 卿にすっかり共鳴し、魅せられ、傾倒していったのである。

“Byron 卿には手を出すなヨ。あとの崇<sup>たた</sup>りがこわいぞヨノ”

詩人の生涯を通じて、常に、詩人の影で私語<sup>さきや</sup>かれ続けた文句であった。“呪われた魔性 Byron”の姿は、今や Annabella に対峙した。Caroline が Byron を知って、一人の狂女と化したよりも、或る意味ではもっと worse な大きな悲劇が更に引き続いて、もう一つ生まれつつあった。

総べての人がそうである様に Byron にも 謎の神秘なる奥地——彼の内なる孤独地帯——現実の、そして想像上の罪惡の秘密<sup>ひみつ</sup>が厳然として存在した。たしかに一個の詩人として彼の總べての感覚は、最高度に高揚されていた。孤高<sup>ここう</sup>バイロンノ故に バイロンは冷然と女性を觀た。

Byron が永遠の愛を誓い得た女性が——彼の生涯、星ふる如く数多くの女性遍歴を重ねながら描かれた 絢爛たる愛欲の絵巻の中で——只の一人でもいただろうか。

詩人自身は別の意味で自分は Childe Harold ではないのだ。“Childe”は全く違う架空の人物である事を強調する。“私が世に送り出した Childe Harold なる人物に、私はなりもしないだろうし、なりたくもない”。と述べている。如何にも 彼の性格の多くは、極めて非チャイルド的であった。Byron は性格的に秘密主義であるどころか、全面的に自分を抑制する事が出来ず、氣儘に傍若無人に振る舞った。彼の友人達は、彼の心の中で 活発な遊び好きの、いたすら好きの、ひょうきんな、大声を立て笑い興ずる遊び仲間として、常に どんちゃん騒ぎを演じていた。

Byron の Childe 的 ‘暗さ’ と ‘非 Childe 的’ 陽性 ‘其の中間で この詩人の諷刺的天分が 対女性観に於いても微光を放つのである。

“私はいつもそこに辿り着く。そして 生涯私はその事を怖れねばならないでしょう”。と Annabella に語った。Annabella は今、生涯を通じての 最も重大な、そして、fatal な局面 にたたされていた。Childe Harold が世に出て、Annabella がこれに心酔した事と、詩人が 自分のゆきかたを変える事になりゆく事とは、全く別問題であったので、Byron の天分が、彼女によって束縛される事はありません事だった。

Elizabeth Milbanke (Lady Melbourne) は、Annabella の父、Ralph Milbanke 卿の姉である。62才にして今尚美しい、淡いブルーネットの魅力に溢れ、茶目っ気たっぷりの、おきゅんな、やんちゃな、18世紀英国の典型的女性である。彼女は過去に於いて Lord Egremont と情を通じ、彼女の次男の William の父親が Egremont 卿か、それとも Melbourne 卿か、どちらかはっきりしない——それ程、巧妙に浮気上手の女性であった。

詩人は <sup>アスパシア</sup>Aspasia ——ギリシャ、アテネの遊女、Pericles の情婦——の現代版である、この超絶倫の精力の女性 Lady Melbourne に、忽ちうっとりと魅せられて、早速彼女に手紙を書いた。“もし貴女がもっと若かったら、私は貴女を恋して気が狂ったであります”と。Byron は Caroline と 狂気の恋愛沙汰を続け、世の <sup>ひんしゆく</sup>輦轡を買ったが、この Lady Melbourne (Elizabeth Milbanke) は、慎重派の代表であった。もし詩人を Caroline との泥沼から救い得る女性がいるとするならば、この Lady Melbourne をおいて、他には誰もいなかっただろう。

Byron は Annabella との結婚により、自分の心の憂愁と暗黒、倦怠から脱出したいと考えた。Lady Melbourne はその考えに同意した。そして其の件を巧みに 姪の Annabella に切り出した。Annabella は理想の夫として、どのような男性を望んでいたのだろうか。

伯母の Melbourne からこの縁談を持ち出された時、Annabella はしっかりした口調で、

“私は理想の夫として 逞しい感情が常に 責任感と理性によって支配されている様な男性を望みますワ”と答えた。だが然し、それは、Byron を意識して、Byron へ向けられた言葉ではなかったようだ。

Melbourne は少しムッとしたが“貴女は只、爪先で立っているだけだワ”と当意即妙に応じた。Annabella は Byron が Melbourne 夫人を介して、非常に固苦しい求婚の申し出を書き送った時——10月8日の日記の中で、Byron の性格を分析した。そして12月に Byron 宛に拒り状を書いた。彼女は今でも尚、Byron は紛れもなく Childe Harold と信じ込んでいた。そして

Childe Harold とは——心は絶えず不安に揺れ乍ら、常に悪と善との間を低迷し、歪められたプライドを持ち乍ら、それを 善に見せかけようと偽装している人物——であると推断した。然し、Annabella は詩人の求婚の申し出を断わる事に決意した。Annabella は Byron に対して、結婚に依る家庭生活の中で自分を幸福にしてくれるであろう強い愛情を期待する事が出来なかったのである。

Byron の求婚の決意が激しいものであったと同様、Annabella の拒絶の意志も不動のものであった。然し Byron は、Lady Melbourne に対して、心の平静さを装い手紙を書き送った。

“令嬢 Annabella への貴女の御尽力を心から 感謝して居ります。令嬢 Annabella の拒絶の決意は私が困惑する程固いものです。いや、むしろ、私と Annabella は、延々と無限にのびる平行線<sup>など</sup>を辿るようです。”

Annabella の返事は全く直截的であったが、Byron に対し終始、誠実な態度<sup>つらぬ</sup>を貫いた。それはとも角として Byron にとって、Annabella との結婚による最大の魅力とは——その事によって、彼が Lady Melbourne を自分の伯母 (his aunt) とすることが出来ることにあった。

11月 Melbourne 宛に手紙を書いた。

“私は Annabella との仲が絶たれた事を、むしろ内心喜んでいます。Annabella を私が思う心は、例えば a cold collation (断食中許される軽食) です。

然し私に必要なのは、むしろ hot supper でフーフーと吹き乍ら もりもりと腹一杯食べたいのです”と。

然し其の hot supper は、既に新しい愛人によって用意されていた。そしてそれを Byron は もりもりと食る如る食べ且つ飲んでいた。

新しい愛人とは Oxford 伯爵夫人であった。貴族的 Whig 党のパーティで、詩人は度々彼女に逢っていた。彼女は熱烈な過激派 (the Rodical) 党员として彼の唯一の政治的関心の強い愛人であった。

彼女は魅力的。秋九月のシーズンを 彼女の館へ滞在するよう詩人を招いた。Lady Oxford は今、Byron にとって魅力的愛人であったが、クレオパトラの如く“40才の女王”であり Herefordshire の Eywood の田園の 彼女の館を訪ねる時、そこが煩わしき憂き世の中の——ロマンチックな国であった。

11月9日、執拗に迫る Caroline と、どうにか絶縁する事が出来た。それは彼女が Lady Oxford に対して 疑惑の怒りと批難の罵声を—— Sturm und Drang なる 1760年代流行の、独文学 style で、特に Caroline は造詣が深かったのだが、それを駆使して長々と 浴びせかけた後の事であった。Byron は返事を書き送った。

“Lady Caroline! 私達の愛は二人っきりで独占できる仲ではないのです。私は今、別の女性を熱愛しています。私は最早や、貴女の愛人ではありません”。

かつては彼女を ‘absurd’ だが魅力的、かわいい人と呼び乍ら 今はもう ‘absurd’ であり且つまた最も ‘contemptibly wicked of human productions’ 軽蔑すべき最もいけない女 と吐き棄てた。Caroline が<sup>あ</sup>えて Byron の髪の一房を要求した時彼は Lady Oxford の髪を、自分の髪の代りに Caroline に送り届けた。Byron の対女性観の冷然たる 性的アナーキストの一面を、まざまざと見せつけている。

Caroline はこの手紙を脚色し、“Glenarvon”と題して、ロマンチックな非

常識だが機智に富んだ小説として出版した。

1811年秋、ポツカリと大きく口を開けた詩人の心の虚無感は、其の翌年再び どっと襲って来た。とに角、是が非でも旅へ出なければならぬと思う。

“俺は、憂さ晴しの女性遍歴とは何れにしても絶縁せねばならぬだろうか？”

Byron は明日の事を考える。其の時突然姉 Augusta がロンドンに押しかけて来る。彼女の家は New Market の近くの six Mile Bottom にあったが、競馬好きの夫 Leigh 大佐故に 三人の幼児を抱えどうしても経済的にもちこたえる事が出来なかった。

Augusta は、詩人が総べて東洋のロマンスから引き出す事が出来る様な 彼好みの、官能的優しさ、黒髪明眸、ギリシャ人的、引き締まった口許を備えた、未だ29才の若さであった。

Like Leila following her Giaour

待女のように従順に そして献身的に詩人に付き添って行動した。そして詩人を最も身近かに引き付けたのは、彼女が Byron の分身だったからである。だから彼女も Byron のはにかみと笑いを持っていた。

Do you think there is one one person here who will dare look into himself?

と Byron はかつて問いかけた事があった。今 Byron は敢えて Augusta の心の中を覗き見た。そしてそこには自分自身の姿を見た。

<sup>ナーシサス</sup> Narcissus——ギリシャ神話で、水中に映った自分の姿に憧れて死んで水仙化した青年——は詩人の一面であり、詩人は、それだけで充分 <sup>しあわせ</sup> 幸であった。Byron は Narcissus の如く、何故か Augusta と共にいる時、心が和んだ。然し 彼には ‘forbidden love’ 禁じられた恋という罪の意識が絶えず脳裏をかすめ離れる事はなかった。詩人は Annabella に向かって

“人生の最大の目的は sensation である”。とやがて告げる事になった。然

し、詩人の心の中には、最初感覚程楽しくはない。もう一つの感覚——肉欲的罪悪感——が潜んでいた。

Augusta は夫に虚待されて 彼女の ‘Baby Byron’ (詩人のこと) が望むならば、どのような行動であろうと、それについて行くであろう。今 Augusta が詩人の愛人であることは公然たる事実であった。詩人の犯しつつある罪に Augusta が只、黙従したことは、詩人の罪の呵責を募らせていったに違いない。詩人は his ‘goose’ 詩人の後に付き纏う Augusta を何処へ連れて行こうとするのだろうか？ この Augusta の愛称は忽ち世間の批難的となった。

8月18日、彼の心を打ち明ける事の出来る友、Lady Melbourne に、Augusta との仲を打ち明けて心を和らげ、罪の意識を解こうとしたが、その文句をしたための事が どうしても出来なかった。

Augusta に奇せた Byron の愛は 終生、かわらぬものであった。Augusta と共にいるとき 詩人の心は いつも やすらぎ くつろぐことが できた。

詩人が 終生の愛を<sup>つらぬ</sup>貰った 唯一人の女性であった。それは— Augusta が名実ともに、Byron の分身であったからなのである。

‘Augusta によせる うた’ は

When Fortune changed—and Love fled far,  
And Hatred’s shafts flew thick and fast,  
Thou wert the solitary star  
Which rose and set not to the last.  
Oh! blest be thine unbroken light!  
That watched me as a Seraph’s eye,  
And stood between me and the night,  
For ever shining sweetly nigh.  
And when the cloud upon us came,  
Which strove to blacken o’er thy ray—

Then purer spread its gentle flame,  
 And dashed the darkness all away.  
 Still may thy Spirit dwell on mine,  
 And teach it what to brave or brook—  
 There's more in one soft word of thine  
 Than in the world's defied rebuke.

運命は 狂い	愛人は去り
憎悪の征矢の	吾に 繁く
されど仰ぎて	永遠に在る
一つの 星ぞ	君こそは

祝福されよ	その 光り
天使の 瞳	吾を凝視め
吾と闇黒との	間 より
優しき光り	なげかける

君の光りを	消さむとて
暗雲頭上を	覆う とき
浄らなるもの	焰えさかり
闇を照らして	ひろがりぬ

照らせよ つねに	吾がみちを
忍えよ挑めと	告ぐるがに
君のやさしき	ひとことが
世の誹謗より	吾を 訓す

“打ち明けたい／ だが止そう／” と筆をおいた。過去の何れの場合よりも、



窮地に追込まれた、その心境を四日後に Moore に書き送った。

“多くの女性群と共に暮す事は出来ぬ。それなのに多くの女性なしに生きる事は不幸である”と。

Moore に意中を打ち明けたその日、沈黙を守っていた Annabella から、求婚をはねつけた非礼を謝罪する手紙を受取った。然しそれは友情と忠告の旨を述べた 長い手紙であったが、“仮想上の報いを求めない愛情”の事を述べた彼女の動機については、全くふれていなかった。

“私の心の最も強い愛情は、報いを求めるという希望を伴うものでありません。あなたが何時迄も あなたの気持ちを占拠し、あなたの理性を貫く一つの目標を持たれる事を望みます”。

この忠告は 皮肉にも詩人には全く適中するものであった。

Augusta は実際、詩人の気持ちを永久に占拠した。そして、彼は遂に Melbourne に自分の立場を打ち明ける事により 自分の理性を行使しようとした。

His Aspasha (ギリシャの遊女) なる Lady Melbourne は、詩人が“駈落ち”の事を考えていることを知って、ゾットした。どうしても、そうしなければならぬのなら、Augusta は連れなくて 外国へ駈落しようと歎願した。然し、詩人はどうしてもそれは約束しようとしなかった。この決定的瞬間、幸運にも、ケムブリッジ時代の友人 James Wedderburn Webster が Yorkshire Aston Hall の彼と彼の妻、Lady Frances の許へやって来て逗留するように勧めて呉れた。

この館は、実は詩人の父 ‘Mad Jack’ Byron が Augusta の母——その時、他の男の妻であったが——を連れて 駈落したその家であった。今、その息子たる詩人は Colonel Leigh リー大佐の妻 Augusta との螺旋状情事をきり開く為に Webster の妻 Frances を必要とした。それでも、Aston への二度の訪問は——1813年9月下旬と 10月初旬——Augusta との破局を引き延ばすのに役立った。

Webster は 妻への不貞故に、久しく妻の愛情を失っていた。Frances は、Byron の無意識の動きに鈍感であったが、二人の仲は急激に深まっていった。

結局、彼女の肉体に 詩人はすっかり魅了されてしまった。彼女は詩人の手中に落ちるだろうか？

彼女が bible——異教徒の聖書——ではかられるのであれば、何の支障もないのではなからうか？

10月中旬、その試練の日が来た。Webster は、詩人と Frances が billiard room で二人っきりになる事を黙認した。二人の最終ラウンドを決行すべく Newstead で午前二時に合った。

ここで詩人は、それとなく誘いをかけた。

Frances は積極的だった。詩人に自分の愛を打ち明けた。そして一見、自分を誘惑しないで欲しいと歎願するが如く振舞いつつも、身体ごと投げ出した。その結果につき 詩人が Lady Melbourne に宛てた報告では“私は彼女を割愛した” I spared her! と書き、なかば、騎士的であり、なかば喜劇的でもあった。

然し引き続き Melbourne に書き送ったこの情事は、一連の火花の如く烈しいものとして書かれており、まだ完全に終わっていなかった。

Lady Frances は、詩人がその肉体にのみ、彼女の fanny（性器）にのみひかれた女性であったのだろう。‘墮落’の事は、終生詩人の念願より離れる事なく、執拗に纏わりついてしたが、その相手を運ぶとすれば、結局 Lady Francesこそ嗜好の伴侶であったかも知れない。

詩人の身边には、ロマンスの嵐が その生きざまの中で、殊の外強く律動した。

‘Yawning’ と ‘love affair’ の iambic meter を奏でた時代であった。

1815年11月、再びロンドンに舞い戻った詩人の名声は、既に響きわたり、今迄よりもっと派手やかにもて囃されたが、詩人の心の中は千々に乱れていた。

屋間の酒宴と ‘らんちき騒ぎ’ が終わると ‘The Bride of Abydos’ の執筆に心血を注ぐ事に、ホッと心を和らげる事が出来た。これは、トルコ風の物語詩として書かれたが、ヒロイン Zuleika の4分の3は Augusta を、4分の1は

Francesを描いたものである。

1813年11月13日以降書き綴っていた日記の中で、12月7日に“眠ること、食べること、そして 暴飲、たがを締め、たがを緩める生活。私にとってはきりした生活がどれだけ残されているのだろうか？” と書いた。

詩人は 詩作活動によって生き長らえているのだった。

12月8日、己が罪を活気なく綴りゆく事は止めにして、詩作活動に励む事を決意する。この作品中で Byron 的、奴隷的<sup>どれい</sup>の女性が二人描かれている。

何れの場合も主人公は その女奴隷の自分への溺愛を半ば悔いている。何れも自らの罪に苦しむ Byron 自身の姿である。Byron は、自ら笛太鼓を打ち鳴らし、Caroline から Annabella へと、そして Lady Oxford から Frances へと、情事の相手を目まぐるしく変えていったが、そこに問題は何一つ解決されることなく どうしても脳裏から離れる事が出来ない問題、執拗な一つのチャームが 何時迄も耳鳴り<sup>みみなり</sup>として響き続けている。それは Augusta の事である。貴公子 Childe Harold は、何処<sup>いづこ</sup>へと漂うて行くのだろう。

Grand Tour (1st) より帰国後、詩人を待ち受けていたものは、‘華やかな宴’<sup>はなやかなうたげ</sup>であった。然し既に詩人の身も心も ずたずたに引き裂かれボロボロになった幣履<sup>へいり</sup>の如き<sup>い</sup>生き態は、最早 救い難いものであった。濁流の中を棹<sup>さか</sup>さして逞ましく 己が運命を切り開く勇氣はなく 笹小舟の漂い流離<sup>さすら</sup>うままの姿であった。只、心の中で‘逃避あるのみ’と絶叫する黒い影に脅えていた。“華麗なる憂愁<sup>ひろ</sup>”そこに繰り<sup>く</sup>展<sup>ひろ</sup>げられた愛欲<sup>あいよく</sup>の絵巻は、詩人の 逃避の姿、心の焦燥の影であった。

自分のその影を映すべく 烈しい詩作をする事に依って、辛うじて、せめてのひとときの安らぎ<sup>やすらぎ</sup>を求めて、詩人は Augusta へと走る。そして Annabella へ寄り縋<sup>すが</sup>ろうとする。

必死の悶<sup>も</sup>える日々——そのように長くは続かないであろう！ 詩人はその事を熟知していた。そして、遂に、破局が…………。

1815年1月2日。詩人は Seaham で Annabella と結婚。12月10日。長女 Ada 生まれる。然し其のころ詩人の肝臓障害の為、妻 Annabella への、姉 Augusta への虐待も激化。

Byron が Ada の揺り籠<sup>ゆりかご</sup>の上に のしかかるようにして ‘ああ、Ada よ、お前は私に何という責め道具<sup>せめもぐし</sup>を与えたことだろう?’ と言うのを聞き入り乍ら Annabella の心は冷えてゆき 二人の間が遠く離れてゆく<sup>はなれ</sup>のを感じた。

Byron が自室で Annabella を最後に見おさめたのは、1816年1月14日の事だった。

そこで彼は Augusta と坐っていた。彼は Annabella がさしのべた手を無視するかの如く 押し返して 皮肉をこめて言った。

‘私達三人はどこで又会うのでしょうか?’

‘きっと天国で ですワ’  
と彼女は応<sup>こた</sup>えた。

然し、嗚呼、Byron は Annabella の裳裾<sup>もすそ</sup>をしっかりと掴<sup>つか</sup>んで 天国へ行くことはないであろう、遂にその日は来なかった、これが二人にとって永遠の別れであった。

Annabella にすがって天国に行く事が Byron の切なる願いであり、Annabellaこそ漂泊<sup>さすら</sup>い、たゆたう、病める、この憂愁の詩人にとって 救いの女神であり、そして温く、滋愛にみちみちて差しのべられた優しい手であったのに。